

## 日本統治時代台湾の造園技術者・清水半平の経歴と造園活動

Personal history and landscaping activities of Hampei SHIMIZU as a landscape architectural technician during the Japanese colonial period in Taiwan

栗野 隆\*

Takashi AWANO

**Abstract:** This paper focusses, on the achievements of Hampei SHIMIZU (1890-1981). The results of document analysis and an interview of a descendant of SHIMIZU, led to this paper's new findings: The reason which Hampei moved to Taiwan was that he lost his house and farmlands in Gumma to a flooding disaster. The reason which he started to grow landscape architectural trees and foliage was at the request by Governor General of Taiwan. He grew about 60 species of landscape architectural trees and foliage, imported and exported them to and from Japan. Then he started landscaping. The gardens made by him were in and around the east area of Taiwan. His company had not only Japanese staff members but also native Taiwanese staff members. The organization of his company reflected the structure under the Japanese colonial period in Taiwan. Hampei worked as a president of a post office and the chief of Yoshino village and other public occupations. The reason he could work in the public sector was because of not only his contribution to Yoshino village but also that he had moved to Taiwan as a private immigrant.

**Keywords:** Japanese colonial period, Taiwan, landscape architectural technician, modern landscape architecture, Hampei Shimizu

**キーワード:** 日本統治時代, 台湾, 造園技術者, 近代造園, 清水半平

### 1. はじめに

日本統治時代の台湾では、台湾総督府が整備した公園、官邸、住宅、料亭・旅館等に和風庭園が営まれた。旧台湾総督官邸庭園、金石瓜太子賓館庭園等の現存するものは文化財として法的に保護され、観光客も訪れる。日本統治時代台湾の造園技術者に関する先行研究として、公園の設計は総督府や県庁の営繕課技師が担当し、総督府関係の官舎、公共施設の庭園は総督府営繕関連役員が造営を担当した可能性を指摘したもの<sup>1)</sup>、台湾総督府の技師を歴任した原熙<sup>2)</sup>、国立公園計画においては本多静六、田村剛が関与したことを明らかにしたものがある<sup>3)</sup>。さらに造園樹木の養成栽培と造園業を営んだ民間造園技術者に注目し、日本人・台湾漢人66名の氏名、所在地、営業内容を明らかにした論文も確認できる<sup>4)</sup>。この先行研究では、日本人造園技術者の台湾渡航の経緯と台湾での具体的な仕事内容を解明できず今後の課題とし、台湾総督府や議会議員等の職に就いた造園技術者の存在も指摘しつつ、なぜ民間造園技術者が公職に就いたかの検討の必要性を提起した<sup>4)</sup>。

以上を踏まえ本論文では、日本統治時代台湾の造園技術者・清水半平(1890~1981)(写真-1)を対象とした。本人物を対象としたのは、先行研究で造園樹木の養成栽培と造園業を営んだ民間造園技術者が公職に就いた経歴が確認され<sup>4)</sup>、検討すべき技術者として妥当性が確認できたからである。研究目的は、清水半平の台湾渡航経緯、台湾での造園活動の詳細、公職就任理由の解明である。研究方法は、清水半平が残した履歴書の写し<sup>5)</sup>、回顧録<sup>6)</sup>、文書<sup>7)</sup>、図版<sup>8)</sup>、写真<sup>9)</sup>の分析、清水半平の孫・清水一也氏への聞き取り調査<sup>10)</sup>、「台湾総督府職員録系統」<sup>11)</sup>の分析、清水半平の会社広告<sup>12)</sup>の分析とした。特に履歴書<sup>5)</sup>は和紙に墨書で記載され、「昭和二十一年勅令第二百八十七号二依」とあることから、「外地官署所属職員の身分に関する勅令」にもとづき作成された信頼性のある情報源といえる。なお、半平は終戦後の昭和21年(1946)4月に日本に引き揚げ、7月より高崎市連雀町にてしみづ農園として種苗業を再開した<sup>10)</sup>。昭和32(1957)年に株式

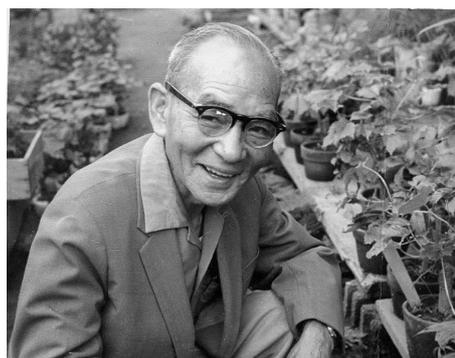


写真-1 清水半平(1890~1981)(清水家提供)<sup>9)</sup>

会社に改組し、代表取締役役に就任した<sup>10)</sup>。半平の子・一美、孫・一也氏もしみづ農園に入社し造園業を半平と共に発展させた<sup>10)</sup>。清水一也氏は、昭和56(1981)年に逝去した半平と30年以上に渡って生活を共にし、台湾での造園活動に関する数々の逸話を半平から直接聞いた人物<sup>10)</sup>である。社会活動としても一也氏はしみづ農園会長のほか、(一財)台湾協会代表理事・会長として日台間の学術・文化交流を推進し<sup>10)</sup>、戦前から戦後、現代の台湾の各種事情に通暁し、極めて信頼性の高い情報を有する人物である。

既往研究では日本統治時代台湾の民間造園技術者の活動を詳細に把握したものは皆無であり、本研究は民間日本人の台湾での具体的造園活動に関する知見を提出することにより、日本と台湾の近代造園史研究に貢献するものである。

### 2. 清水半平の台湾渡航前史

清水半平は明治23(1890)年10月31日、群馬県多野郡八幡村大字木部村(現在の高崎市南八幡地区)に、父・泰三郎、母・とみの子として生まれた<sup>5,10)</sup>。父は八幡村役場の役人で農業も営

\*東京農業大学地域環境科学部

んでいた<sup>10)</sup>。半平は幼い時から農業をよく手伝った<sup>10)</sup>ことが、後に造園樹木を養成栽培する素地の形成につながったと考える。八幡尋常小学校を明治 35 (1902) 年に卒業した半平は、宇都宮通信事務伝習所に学び、明治 39 (1906) 年に同校を卒業した<sup>5)</sup>。同年、高崎郵便局に通信事務員として入局した半平<sup>5)</sup>は、高崎の米穀商・須田家の長女・ミチヨと台湾渡航直前に結婚した<sup>6)</sup>。

### 3. 清水半平の台湾における造園活動

#### (1) 台湾への渡航経緯と種苗・造園業の創業

半平の台湾渡航は明治 43 (1910) 年 8 月の大水害に起因する<sup>10)</sup>。この災害は長雨とふたつの台風による水害で県内の死者・行方不明者は 306 人にのぼった<sup>13)</sup>。特に八幡村の被害が甚大で田畑・財産を失った 14 戸 51 名は生活再建のため朝鮮半島に移民した<sup>13)</sup>。清水家もこの大水害で田畑と家を失い、半平の兄が母とともに朝鮮半島に移民した<sup>10)</sup>。須田家は、知己のある須田菊蔵が台湾東部の花蓮港に移民していたため、須田家は台湾総督府が奨励した官営移民に応募し、花蓮港に渡航した<sup>6,10)</sup>。ただし半平は官営移民の手続きをせず、須田家に付属する形で渡航した<sup>6,10)</sup>。したがって半平は官営移民ではなかった。

半平を含む須田家が台湾に上陸した日付は、半平の履歴書では明治 43 (1910) 年 11 月 10 日<sup>5)</sup>、回顧録では明治 44 (1911) 年 11 月 14 日<sup>6)</sup>であった。花蓮港には移民村として吉野、林田、豊田の 3 村があり、半平と須田家は吉野村に入村した<sup>6)</sup>。『三移民村』(1928)には吉野村、林田村、豊田村に移民した日本人の感

想があり、渡航理由には事業の失敗、内地の窮屈な生活からの脱出、内地の耕地の狭さが挙げられていた<sup>15)</sup>。半平の渡航理由は大水害による畑と家の喪失のためであり<sup>10)</sup>、造園のために渡航したのではないことが明らかとなった。

官営移民とは、台湾の統治上の必要性から日本の移民を奨励した制度であり、未開の地・台湾の農夫への登用を目的とし、特に東部台湾では移住を希望する農家を総督府の保護のもと農地の開墾をすすめ、「内地風の農村」を建設することを目指したものであった<sup>14)</sup>。官営移民でなかった半平は最初、農夫には登用されなかったが、明治 44 (1911) 年 12 月に農夫に登用された<sup>6)</sup>。半平が得た土地は総督府の公有地であり、アスパラガスなどの熱帯観賞植物やツツジ等の造園樹木の試験栽培を総督府からの求めで始め、村民にも種苗を提供した<sup>10)</sup>。『台湾官営移住案内』には官営移民による水稻、甘蔗、茶、甘藷、陸稻等の栽培が確認できたが、造園樹木の栽培に関する記述はなく、半平が栽培した造園樹木は主たる栽培植物ではなかった可能性がある<sup>14)</sup>。『全国著名園芸家総覧』(1938) (以下、『総覧』と記載する) 掲載の半平の会社広告(図-1)には、「椰子科植物 熱帯植物 造園」を営業項目に掲げ、「創業明治四十四年」の記載が見える<sup>12)</sup>。聞き取り調査から、造園技術者としての創業は、造園樹木や観賞植物の養成栽培を始めたこの時期である示唆<sup>10)</sup>を得た。半平の屋号は「清水種苗園」<sup>12)</sup>といい、正式な設立は花蓮県文化局保管の半平の戸籍関係資料に大正 2 (1913) 年と記されていたことを一也氏が台湾現地で確認した<sup>10)</sup>。

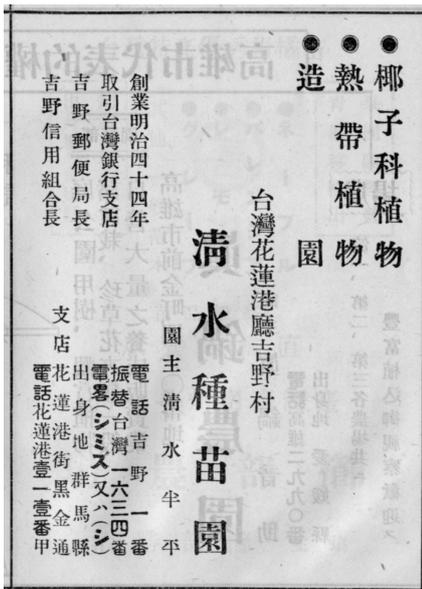


図-1 清水種苗園の会社広告  
出典：『全国著名園芸家総覧』<sup>12)</sup>



図-2 清水種苗園位置図 (吉野村中園地区)  
清水半平の直筆図<sup>8)</sup>をトレース



図-3 清水種苗園配置図  
清水半平の直筆図<sup>8)</sup>をトレース

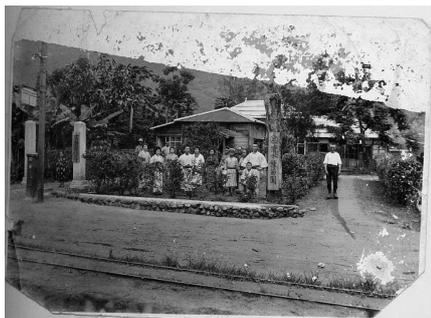


写真-2 昭和初期の清水種苗園とそのスタッフ (清水家提供)<sup>9)</sup>



写真-3 遮光苗圃の様子(昭和7年3月)  
(清水家提供)<sup>9)</sup>



写真-4 花卉培養場の様子  
(清水家提供)<sup>9)</sup>

表一 清水半平が栽培した造園樹木・観賞植物の一覧 (清水半平自筆「添付書類植木類明細書」<sup>7)</sup>より作成)

地区	記載された種名	区分	員数	推定した種名	
一 号 栽 培 地	斑入棕櫚竹	特大	1 株	シュロチク	
	支那観音竹	大乙	200 本	不明	
	棕櫚竹	大甲	1 株	シュロチク	
	棕櫚竹	中甲	6 株		
	観音竹	中乙	1 株	カンノンチク	
	観音竹	大甲	3 株		
	ヤハズヤシ	特大	3 株	ヤハズヤシ	
	アレカヤシ	中甲	4 株	ヤマドリヤシ	
	フアニツクス ロベリニー	特大	2 株	シンノウヤシ	
	フアニツクス ロベリニー	大甲	2 株		
	フアニツクス ロベリニー	中甲	9 株		
	槇 (造込)	特大	4 本	イヌマキ、ラカンマキ、コウヤマキ	
	槇 (造込)	中乙	1 本	ヒマラヤスギ	
	ヒマラヤシーダー	特大	1 本		
	ヒマラヤシーダー	中甲	1 本	カイズカイブキ	
	貝塚伊吹	特大	16 本		
	貝塚伊吹	大甲	24 本	クロマツ、アカマツ	
	貝塚伊吹	中甲	2 本		
	日本松 (造込)	特大	3 本	リュウキュウマツ	
	日本松	中甲	4 本		
	琉球松	特大	1 本	リュウキュウツツジ	
	琉球松	大甲	1 本		
	琉球松	大乙	1 本	リュウキュウツツジ	
	平戸ツツジ	特大	1 株		
	平戸ツツジ	大甲	12 株		
	平戸ツツジ	大乙	23 株		
	平戸ツツジ	中甲	29 株		
	平戸ツツジ	中乙	20 株		
	平戸ツツジ	小甲	16 株		
	平戸ツツジ	小乙	87 株		
	サツキ	甲	40 株		サツキツツジ
	木榎	中甲	1 株		カシワ、モッコク
	木榎	中乙	3 株		
	丸ツゲ	大甲	4 株	ツゲ、イヌツゲ	
	五色南天	大甲	7 株	ナンテン	
	五色南天	大乙	7 株		
	南洋バラ	特大	1 本	アガサ (古写真より推定)	
	山茶花	大甲	1 本	ヤブツバキ、サザンカ	
	山茶花	大乙	3 本		
	奈南天	特大	1 株	不明	
	奈南天	中甲	6 株		
	唐棕櫚	特大	2 本	トウジュロ	
	ローバイ	大甲	10 株	ロウバイ	
	五色ツタ	特大	5 株	不明	
	南洋樟樹	大甲	1 本	不明	
	電信蘭	空欄	2 株	不明	
	匍柏杉	特大	1 本	不明	
	カカオ	大甲	2 本	カカオノキ	
	白南天	大甲	7 株	シロナンテン	
	ハツタ	特大	1 株	不明	
	杉丸仕立	特大	1 本	スギ、タイワンスギ	
	文旦	特大	1 本	ブンタン	
	モチノ木	大乙	2 本	モチノキ	
	モチノ木	特大	1 本		
	朴ノ木 造込	特大	1 本	ホオノキ	
	竹柏 (種子用原木)	特大	1 本	ナギ	
	内地杉 (庭木仕立)	特大	6 本	スギ	
	檜 (庭木仕立)	特大	2 本	ヒノキ	
	木犀	特大	1 本	キンモクセイ、ギンモクセイ	
	梅 (老木)	特大	1 本	ウメ	
	黒柿 (老木)	特大	1 本	ヤブキ、マダギ、シガキ、カキ	
	黒柿 (老木)	大甲	1 本	ヒノキ、ササギ、ササキ等	
	斑入ヒバ	特大	1 本		
	熱帯樹ビロウ	特大	1 本	ビロウ	
	熱帯樹ビロウ	大甲	1 本	ダイオウヤシ	
	キングヤシ	大甲	2 本		

注: 「推定した種名」欄の記載は、上原敬二『樹木大図説』(1959)、呂福原他『臺灣樹木圖誌』1巻(2000)・2巻(2006)、3巻(2010)、Ylist (<http://ylist.info/index.html>)を参照した。

半平は造園樹木や観賞植物の養成にあたり、花蓮港庁の農事試験場職員から植物の繁殖や栽培方法を学んだ<sup>10)</sup>。

## (2) 清水種苗園の概要

清水半平の清水種苗園は花蓮港庁吉野村中央の中園地区に所在した(図一2)<sup>8)</sup>。園主は半平が務め<sup>12)</sup>、日本人造園技術者には、半平の長子・一美、一美の叔父にあたり宝塚山本で造園、植木栽培の修業を積んだ福田時彌が在籍した<sup>10)</sup>。先住民(アミ族)をスタッフとして雇用し、全体で十数名程度が働いていた<sup>10)</sup>ことが

地区	記載された種名	区分	員数	推定した種名	
一 号 栽 培 地	花柵榴	大甲	1 本	ザクロ	
	日本樫ノ木 造込	特大	3 本	アラカシ、シラカシ	
	檜葉	大乙	4 本	ヒノキ、サワラ、ネズコ、アスナロ等	
	檜葉	中甲	4 本	タイサンボク	
	泰山木	特大	2 本		
	大王ヤシ	大甲	1 本	ダイオウヤシ	
	砂糖ヤシ (種子木)	大甲	1 本	サトウヤシ	
	株立砂糖ヤシ (種子木)	大甲	2 本		
	孔雀ヤシ	特大	2 本	クジャクヤシ	
	小楠木	大乙	2 本	ショウナンボク	
二 号 栽 培 地	貝塚伊吹	特大	2 本	カイズカイブキ	
	ツツジ	大甲	1 株	ツツジ類	
	熱帯植物ビロウ	中甲	10 本	ビロウ	
	日本松	大甲	1 本	クロマツ、アカマツ	
	日本松	大乙	5 本		
	観音竹	中甲	7 株	カンノンチク	
	台湾松	大甲	2 本	タイワンマツ	
	楓樹	大甲	2 本	フウ、タイワントウカエデ	
	棕櫚竹	大甲	20 株	シュロチク	
	ツツジ (造込)	大甲	32 株	ツツジ類	
ツツジ (造込)	大乙	43 株			
三 号 栽 培 地	貝塚伊吹	大乙	365 本	カイズカイブキ	
	アレカ椰子	特大	130 株	ヤマドリヤシ	
	孔雀椰子	特大	19 株	クジャクヤシ	
	蘇鉄	小甲	40 株	ソテツ	
	ヤハズ椰子	大甲	42 株	ヤハズヤシ	
	ヤハズ椰子	大乙	40 株		
	日本松 造込	大甲	13 株	クロマツ、アカマツ	
	日本松 造込	大乙	109 株		
	日本杉 (造込)	大乙	23 株	スギ	
	ヒオルベヤシ	大乙	18 株	不明	
	ラフィヤヤシ	大甲	20 株	ラフィヤヤシ	
	斑入立柏杉	大乙	10 本	不明	
	観音竹	大乙	100 株	カンノンチク	
	ユスラヤシ	大甲	30 本	ユスラヤシ	
	フアニツクス ロベリニー	中甲	5 本	シンノウヤシ	
	四 号 栽 培 地	ヒオルベヤシ	大	40 本	不明
		アレカヤシ	特大	60 株	アレカヤシ
		孔雀ヤシ	特大	10 株	クジャクヤシ
		孔雀ヤシ	小	500 株	
		扇ヤシ	特大	16 本	オウギヤシ
扇ヤシ		大	5 本		
平戸ツツジ		小	1900 本	リュウキュウツツジ	
小楠木		中	50 本	ショウナンボク	
木榎		小	124 本	カシワ、モッコク	
アレカヤシ		大甲	970 株	アレカヤシ	
ナギ 造込	大甲	390 株	ナギ 造込		
五 号 栽 培 地	フアニツクス ロベリニー	大甲	35 本	シンノウヤシ	
	フアニツクス ロベリニー	大	45 本		
	フアニツクス ロベリニー	中	17 本		
	泰山木	大	44 本	タイサンボク	
	日本杉 (造込)	大	60 本	スギ	
	木屋	大	16 本	キンモクセイ、ギンモクセイ	
	貝塚伊吹	大	370 本	カイズカイブキ	
	貝塚伊吹	中	1018 本		
	ストロベリークワパー	大	320 本	不明	
	木榎	大	93 本	カシワ、モッコク	
	ランシン木	苗	117 本	ランシンボク	
	楓樹 造込	大	17 本	フウ、タイワントウカエデ	
	平戸ツツジ	大	1455 株	リュウキュウツツジ	
	平戸ツツジ	中	608 株		
	榎	中	43 本	サカキ	
	サツマ杉	中	66 本	クサリスギ	
	大王ヤシ	大	82 本	ダイオウヤシ	
	ヒオルベヤシ	大	67 本	不明	
	日本松	大	20 本	クロマツ、アカマツ	
	斑入林杉	大	20 株	不明	
ユスラヤシ	大	28 本	ユスラヤシ		

確認できた(写真一2)。『総覧』<sup>12)</sup>には花蓮港街黒金通に支店があったことも確認できたが、具体的な場所、事業所の規模は不明であった。造園活動の地理的範囲は花蓮港庁の吉野村、林田村、豊田村を中心に、北は太魯閣新城を含む東台湾が主たる活動地域であった<sup>10)</sup>。南方面では、鉄道網と道路網の発達により台東までその範囲は広がっていた<sup>10)</sup>。

## (3) 養成栽培した造園樹木や観賞植物

清水半平による造園樹木や観賞植物の栽培地は1~5号栽培地

の5か所<sup>7,8)</sup>にわたる大規模なものであったことが判明した(図-3, 写真-3・4)。1号栽培地には、自宅兼郵便局と種苗園関係施設があり、2号栽培地の北には池が穿たれた<sup>8)</sup>。

半平自筆「添付書類植木類明細書」<sup>7)</sup>から、約60種類の造園樹木、観賞植物を栽培していたことが判明した(表-1)。本書類には植物の大きさ(特大、大、大甲、大乙、中、中甲、中乙、小)と員数が記載され<sup>7)</sup>、半平が細かな生産管理をおこなったことが分かる。植物の種類に注目すると、台湾では一般的な造園樹木のヤシ類や棕櫚竹(シュロチク)や観音竹(カンノンチク)といった亜熱帯性植物の他、平戸ツハジ(リュウキュウツツジ)が数多く栽培されていた<sup>7)</sup>。日本松(クロマツ、アカマツ)、内地杉(スギ)、日本榎ノ木(アラカン、シラカシ)の記載により、日本からの造園樹木<sup>7)</sup>も確認できる(括弧内の植物の記載は筆者が推定した植物の和名)。員数に着目すると1号栽培地は多品種少量生産が基本となっており、5号栽培地はアレカヤシ(大甲:970株)や貝塚伊吹(中:1018本)、平戸ツハジ(大:1455株)など、特定の樹木を多量に栽培する地区であり、地区ごとに栽培方針を設けていたことがうかがえる<sup>7)</sup>。

聞き取り調査から、半平は日本有数の植木生産地・宝塚山本、京都のタキイ種苗、横浜の坂田農園等から造園樹木や観賞植物の種苗を輸入して栽培し、ヤシ類を中心とした熱帯観賞植物を宝塚山本、神戸、横浜に輸送しており、植物の輸出入にも展開していた<sup>10)</sup>ことが分かった。さらに昭和18(1943)年には台湾種苗協会理事に就任<sup>10)</sup>したことから、造園樹木・観賞植物の養成栽培では台湾の主導的地位にあった可能性も判明した。

#### (4) 手掛けた造園空間

清水種苗園が手掛けた造園空間には、1号栽培地に作られた裏庭と表庭<sup>8)</sup>、台湾総督府職員官舎の庭園、第二次世界大戦勃発後の日本軍兵舎の防空植栽、花蓮港庁農事試験場庭園、ゴルフ場の造園<sup>10)</sup>が確認できた。1号栽培地に作られた裏庭、表庭の具体的な姿は不明であるが、総督府高級官僚の官舎では石灯籠や飛石を配し、琉球松や栢植を植栽した和風庭園を作ったという<sup>10)</sup>。花蓮港庁農事試験場庭園は緩やかにカーブする草付き護岸を主とした池と広い芝生を配した庭園で、池の工事を得意とした半平の長子・清水一美<sup>10)</sup>が清水種苗園のなかでも大きく関与したことがうかがえた。チェーンブロック、三又、荷車等の機材や道具類は、すべて宝塚山本から調達したものであった<sup>10)</sup>ことが判明した。

#### 4. 清水半平の台湾における公的活動

清水半平は清水種苗園を営むかわら、大正2(1913)年から昭和21(1946)年まで吉野郵便局長を務め<sup>5)</sup>、吉野村居住市民会長(1925年就任)<sup>5)</sup>、吉野村信用販賣購買利用組合長(1926年就任)<sup>5)</sup>、花蓮港庁協議会員(1938~1939年、1944年)<sup>11)</sup>、花蓮郡役所吉野庄庄長(1939~1942年)<sup>5,11)</sup>など、数々の公職に就いていた。先行研究<sup>9)</sup>では、清水半平ら7名の日本人造園技術者が「台湾総督府職員録」に殖産局技手や市会議員等の職で記載されている点を明らかにし、彼らの公職への登用形態や造園関係業務と公務との重複関係の検討が課題であることを指摘した。

この点をふまえて半平に関する文献資料の精査や聞き取り調査をおこなったところ、原則として官営移民は兼業を許されなかったが、官営移民でなかった半平は種苗・造園業と郵便局長との兼業は通信部に許可を得られた<sup>6)</sup>ことが確認できた。居住市民会は総督府の命令で設けられた村政一切の運営機関であり、半平はその会長を務めた<sup>6)</sup>。特定郵便局長でもあった半平は、兼職は原則的に不可の立場であったが、花蓮港庁長は殖産局長と通信部長と協議し、「例外として半命令的」に引き受けた職であった<sup>6)</sup>。聞き取り調査では、吉野村は特に災害が多かった場所であり、烏山頭ダム建設等を主導した台湾農業の恩人・八田與一の農業水利事業に

て使用した機械と技術者を半平が吉野村に調達し、農業用水路や圃場の整備を主導したことなど、地域における顕著な貢献により、吉野村庄長、花蓮港庁協議会員に就任したことが指摘された<sup>10)</sup>。

半平が統治時代台湾での公職就任には異例的な側面があるものの、兼職の経緯と実態について本稿で知見を提供できたと考える。

#### 5. おわりに

本論文では、日本統治時代における台湾の造園技術者・清水半平を対象に、その経歴と造園活動を明らかにした。その内容を研究目的に即してまとめると以下のとおりとなる。

清水半平が台湾に渡航した理由は、大水害によって田畑や家を失ったからであった。渡航当初から造園を事業とする目的はなく、観賞植物の養成栽培や造園を始めたのは、植物の試験栽培という役割を総督府から与えられたからであった。半平は植物の栽培から造園の設計施工にも展開していった。圃場ではおよそ60種類程度の造園樹木、観賞植物を栽培し、内地(宝塚山本等)とも樹木や種苗の輸出入をおこなった。造園の設計施工では、総督府役人官舎等と和風庭園を手掛け、その活動範囲は花蓮港庁を中心とした東部台湾であった。清水半平の樹木養成栽培・造園を支えたスタッフとしては、日本人以外にも先住民も雇用されていたことが明らかになり、日本統治下の台湾ならではの造園組織が形成されていたことが判明した。さらに半平が造園技術者である一方で郵便局長や庄長等の公職に就いたのは異例的な側面が強いが、花蓮港庁吉野村における貢献とともに、少なくとも半平が官営移民ではなかったことがその前提となったと考えられる。

以上が、本研究で明らかにした日本統治時代台湾の日本人造園技術者の活動内容である。清水半平という一造園技術者の活動であるが、本論文の成果は、日本・台湾の近代造園史研究上、日本統治時代台湾において民間日本人が如何に造園技術者としての職能を形成していったかを検討する材料として有用である可能性があることを指摘し、本論文の結言とする。

謝辞:本研究を進めるにあたり、貴重な資料のご提供と聞き取り調査にご協力をくださった清水一也様に感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS 科研費18K05712の助成を受けたものです。

#### 補注及び引用文献

- 1) 楊舒淇(2005):日本植民地時代における台湾の庭園造営とその背景について:ランドスケープ研究68(5),431-434
- 2) 井手久登(1996):原照 職域の拡大と専門家養成の先駆者:ランドスケープ研究59(4),239-242
- 3) 劉東啓・油井正昭(1999):第二次世界大戦以前における台湾国立公園の成立に関する研究:ランドスケープ研究63(5),375-378
- 4) 栗野隆(2020):日本統治時代の台湾における民間造園技術者とその営業内容:ランドスケープ研究83(5),479-484
- 5) 清水半平(1946):履歴書:清水家所蔵
- 6) 清水半平(1971):官営移民吉野村回顧録:清水家所蔵(本論文は2015年の複製版を用いた)
- 7) 清水半平(1946):添付書類植木類明細書:清水家所蔵
- 8) 清水半平(1946):中園地区公共施設設置図・清水半平栽培地:清水家所蔵
- 9) 清水家半平額写真ならびに清水種苗園の苗圃等の古写真8葉:清水家所蔵
- 10) 清水一也氏への清水半平に関する聞き取り調査(2020.8.16)
- 11) 中央研究院台湾史研究所:台湾総督府職員録系統ホームページ:<<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action>> 2019年7月17日参照
- 12) 渡部泰輔編(1938):全国著名園芸家総覧(第14版):大阪興信社営業所
- 13) 金井千廣(1997):明治43年の大水害:広報たかさき平成9年5月15日号:高崎市
- 14) 台湾総督府殖産局編集発行(1913):台湾官営移民案内(本論文では『近代台湾都市案内集成第16巻 台湾官営移民案内/三移民村/吉野村概況 官営移民村/大和村建設史』ゆまに書房発行,2015年を用いた)
- 15) 花蓮港庁編集発行(1928):三移民村(本論文では『近代台湾都市案内集成第16巻 台湾官営移民案内/三移民村/吉野村概況 官営移民村/大和村建設史』ゆまに書房発行,2015年を用いた)
- 16) 著者不明(1943):台湾種苗協会が設立され発足する:台湾農會報5(2),129

(2020.9.26受付,2021.3.30受理)